ダイアナ 米国出身、元モルモン教徒

：

明:イスラ ムに 味を持ち始めた彼女の心を、いかに真 の光がとらえたのか。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 女性

より: ダイアナ

日04 Feb 2013

集日 03 Feb 2013

私はコロラド州の、一般的なキリスト教徒の家庭で生まれ育ちました。私の家では、宗教が　に上がることは殆どありませんでした。私の父はモルモン教徒、母はプロテスタントとして育ちました。私は成 するにしたがって、神が存在するのか、そしてもし存在するのならそれが人 にとってどういう意味を持つのかということに、 味を持ち始めました。私は真面目にバイブルやその他のキリスト教文学の勉 をしました。高校生の の私でさえ、バイブルに、特にイエス（神の平安あれ）の性 について明らかな矛盾に 付いていました。ある 所では彼が神であるとし、またある 所では神の子、そして の所ではただの人であると言っているかのようでした。私はそれらの矛盾が、私自身の未熟な理解力から来るものだと思っていました。まず私は、その出版物を 便で受け取ったことをきっかけに、「チャ チ オブ ゴッド」に入会しました。彼らは宗教に して 理的かつ科学的なアプロ チをとっていたため、 味を惹かれたのです。彼らは豚肉の 取を禁じたり、イエスと同じ祝祭日を 用したりしていました。私は彼らの集会に一度行ったきり、なぜかそれ以降は行こうという 持ちになれませんでした。

大学に入学すると、私は「キャンパス クルセ ド フォ　クライスト」主催のバイブル学 会に参加するようになりました。私はバイブル学 を通して、神についての真 の理解を求めていましたが、 局それが何であるかは分かりませんでした。同じ 期に、私はムスリムの男性と知り合いました。私は彼のする礼 がなぜあのような形なのかに 味を持った

ので、クルア ンを み始めました。 もなくして、私はイスラ ムにあるもので、キリスト教に欠けていたものが何であるかに 付いたのです。それは崇 の方法です。それまで私が知っていた礼 とは、ただ「私はこれが欲しい、これが必要だ、私にお与えください」といったもので、その中でも本当の崇 に 当するものは、「イエス 、私の罪のために死んでくれてありがとうございました」だけでした。私は思いました。では、神についてはどうだろう、と。私はイスラ ムの神が、私の信じていた神と同じ神であることを 信していましたが、イエスが なのかということについては、まだ 信出来ませんでした。私は、彼が神の子ではないといことを信じることを怖れていました。なぜなら、そういった信条は地 での永久の　に する、と小さい から教えられてきたからです。

私が通っていたバイブル学 会のリ ダ は、アルジェリアでムスリムへの 道に携わっていたため、彼にいくつかの　をすることにしました。当 、私は非常に混乱していたからです。彼に私のムスリムの友人の来世について ねると、彼は　いなく地 に行くと答えました。また、バイブルに非常に似通っているクルア ンがどうして 物であるか ねると、彼はそれが人々を不信仰者へ めるための 魔の道具であると答えました。そして最 に、私は彼にその中の 述について　したかったので、彼がクルア ンを んだことがあるか ねましたが、彼の答えはこうでした。「いや、そうしようかと思っただけでむかむかするんだよ。」私は 愕し、その を立ち去りました。私が博学なリ ダ として尊敬し、ムスリムたちとも何度か活 をしていたこの男性は、私が 去数カ月でイスラ ムについて学んだことよりも多くを知っていたわけではなかったのです。彼は特 、知 を求めていたわけでもなかったし、好奇心を持っていたわけでもありませんでした。それにも わらず、彼は私の友人が地 に落ちること、そしてクルア ンが 魔の所 であることを 信していたのです。私は、それについて学んだのでもない限りは 信することなど出来るはずがないなのに、彼は明らかにそれを怠っていたことに 付きました。このことは、イスラ ムが神の真理についての道だということの手がかりとなりました。あの会 を持つことが出来たことに、アルハムドゥ リッラ （神に称 あれ）。

私はもっとクルア ンを学び出し、その数カ月 にシャハ ダ（イスラ ムを受け入れるという信仰の宣言）をしました。あれからまだ一年も っていません。私は 在も学びの最中

で、神の真 を求め けています。私は神が いてくれたことにとても感 しています。これは、 理と理性による しい をものともしない真 の宗教なのですから。私は常々、宗教とはそうあるべきだと思っていました。それは筋の通った、 理的なものであるべきなのです。

これが、私がいかにしてイスラ ムに入信したかの 末です。ただ、私がムスリムになる前に、多くのムスリムと出会わなかったことに感 しなければなりません。私が通っていた大学の大半のムスリムたちは冷ややかで、よそよそしい人々だったからです。彼らは非ムスリム、またはそう える人たちに して偏 があったように えました。ムスリムの代表であるべきはずの彼らがとても冷酷に えたため、もし私がそれらの人々と知り合いだったなら、私はイスラ ムから距 を置いていたかも知れません。ムスリムは共有すべき素晴らしいメッセ ジを持っています。それは真 のメッセ ジなのです。私は友人と知り合うまで、イスラ ムとは何かについて全く知る由もありませんでした。もしもアメリカ人がそれを理解したのなら、彼らはそれに し、よりオ プンになるはずなのです。なぜなら、それは真理なのですから。

また、これは私がいままで通り けてきたことの中でも、最も困 なものの一つだったことにも言及しなければなりません。イスラ ムへの改宗は、 への反抗を余 なくされました。なぜなら彼らは断食や、ヴェ ルの着用、禁忌食品の忌避などに合意しないからです。彼らはそれらがばかげていると思っており、私は自分の信じることを くことと同に、家族を失わないよう をつけなければなりません。私はまだヴェ ルを着用出来ていませんが、近いうちにそう出来るようになることを切に っています。もしもそうすれば、（一 的であれ）勘当されるかも知れませんが、それでもそうしたいと思っています。なぜなら、私は神によって女性に定められていることを 行し、慎み深くありたいからです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/939

著作　2006-2015　断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com.　断　を禁じます。